

提言 神奈川県内科医学会

医療界の情報共有のあり方について考える

最近、各地で講演会の開催が困窮をきたす状況となった。製薬業界が定めた自主規制が過剰となり、明らかに行き過ぎと思われる規制が見受けられる。

最適な診療の選択のためには、最適な治療法の検討が必要であり、薬剤の適正使用を視野に入れた医療情報が望まれる。

医薬品の適正使用は適切な薬剤情報なしに、その選択はあり得ない。そこには医薬品情報が中心となる。患者に対する最適な医薬品の選択は的確な医療情報なくして、その選択はあり得ない。そこには患者情報が中心となる。そこには、市民公開講座を含めたあらゆる会の目的がそこにあるのではないだろうか。

「医学」と「医療」の違いは何かといえば、「医学」は科学的な根拠に基づいた体系的な学問である。一方、「医療」は病を治すためのあらゆる分野における知識や経験を集大成した私たちの叡智である。

病を治すための人類のあらゆる分野における知識や経験を集大成した医療のための講演会を望む事は、夢物語と一蹴されてしまうものだろうか。講演会・研究会さらに市民公開講座の実施に当たり、どのような問題点がそこに潜んでいるのであろうか。

製薬業界は、研究者・医療関係者・患者団体等と相互の信頼関係の中で、最適な医療が推進されるよう行動することが望まれる。医療関係者というのは、看護師・薬剤師・介護職など、患者の周囲を取り囲むすべての人々であろう。そこには、製薬業界の人々もすでに医療界の中に内包されるものである。最近の動向をみる限り、社会の信頼に添えていくために、患者を含む、あらゆる立場の人たちと対話するという視点が抜け落ちている。

製薬企業が自らの業界のみで議論するのではなく、すでに自らが医療者であるという自覚のもとに、すべての人々と共に、新たな形の講演会や研究会そして臨床研究のあり方を考える時が来ているのではないだろうか。

今こそ、あらゆる人々が一緒に、真の社会貢献に対する議論を高めていく時ではないだろうか。それはすべて患者を中心としたというより、人を中心とした医療の新しい道を探求する話し合いになるはずである。共に考え、共に悩み、共に励ましあい、共に行動する、医療者の集まりが望まれる。